

海軍戦争体験記録

岡 本 民 雄

野方二丁目

昭和十八年七月、私はその時、陸軍省功績調査部に勤務しておりました。現在の三宅坂の「国立劇場」の場所です。海軍横須賀鎮守府に一等水兵として召集され、横須賀の逸見港（へんみ）より航空母艦の「雲鷹」（ウンヨウ）に乗艦しました。艦首には大菊花の御紋章、艦尾には軍艦旗がひるがえり、海軍軍楽隊の「軍艦マーチ」に送られて、勇ましく波を切り出港しました。初年兵の私は、バンザイ、バンザイの声と共に、心の底から湧き上がってくる不屈の忍耐力と闘志に燃えていました。

行く先は知らされず、生まれて初めての海上生活が始まりました。軍艦の最底甲板に釣床（当時ハンモックとは言えませんが）で寝ます。気持ちが悪くなっても、艦上に吐く事は絶対許されず、自分の靴下を脱いで、その中に吐き、腰にぶら下げます。波は高く、スクリーンが空回りする程揺れます。胃の中は空っぽで、最後には血を吐きました。少しでも艦上を汚すと、「天皇陛下の大菊花紋章の軍艦を汚すとは何事だ」と、口にはいえない程の罰を受けました。腹は減り、尻は叩かれて紫色に腫れ上

がります。ささいな事でも、すぐに罰せられ、食事もらえない等、日本海軍はひどいものでした。艦隊を組んで進む中に、魚雷・機雷を受けて沈んで行く軍艦もあります。艦の上では、毎日上官にしがかれて、生きた心地ありません。

何日か過ぎたある日の朝、小さな島が見えてきました。やつと土が踏めると思うと戦友と手を取り合い涙を浮かべて喜びました。上陸した所は、東経一五一度北緯七度、赤道直下のトラック諸島の夏島でした。

海軍基地第四軍司令部第四一警備隊本部です。司令長官はじめ、隊長以下の人達に迎えられて、やれやれと棧橋を渡ったのもつかの間、「おいッ！一歩前に出ろ」と突然の一喝。これは大変なことになったと、みんな真つ青になってふるえました。「佐々木、お前だ」私の隣の兵士でした。「貴様、キョロキョロして、その眼は大和魂の抜けた兵士の抜け殻だ」と司令長官に横ピンタをくらいました。さあ大変、司令長官にやられたので、他の教官達にマークされてしまいました。戦争中とはいえ、初めて

見る島の風景には誰もつい気をとられてしまします。その夜は、全員腰の抜ける程殴られました。上陸第一回の罰、我々新兵は理由もなく朝に夕に上官に殴られ、殴られる為にトラック島に來たような有り様でした。

島の夜は、消灯ラッパの音と共に静まり、後は波の音だけ。

久しぶりの陸で寝る夜は、故郷が思い出されて思わず涙を流しました。今見るこの月も日本で見える月も同じなんだなあ……と。

第一夜が明けて迎える朝は、珍しいものばかり。初めて踏むリーフ(さんご礁)、南国の木の実、透き通る海底には色とりどりの美しい魚。しかし新兵にはそんなものに心を動かす余裕などありませんでした。手旗信号やカッター(ボート)の練習、

陸戦高角砲の訓練、戦闘の教育と、気の休まる間もありません。私は砲台勤務一番砲手となりました。高角砲の一番砲手とは名前は立派ですが、いざ戦闘開始になっても敵機まで弾は届かず、そのうちに後方より敵機の機銃掃射を受けて、自分が撃つどころか椰子の木陰に身を寄せて、「ナムアミダブツ」と思わず両手を合わせる始末でした。艦砲射撃された時は、弾丸の炸裂音と共にピカッピカッと光が走り、戦友の首が飛び、腕が飛んできます。その度に生きた心地もなく、もうこれで自分も終わりと幾度思ったことでしょうか。そんな中でどうにか無事生き延びてきました。

風呂は月二回位、後は毎日やってくるスコールを利用して体

を洗います。小さい桶に一杯の水で体を洗い、事業服を洗濯します。満足にすぎないまま干し、乾くとそれを着て作業をします。汗と共に事業服に残った石鹼が流れて、体が石鹼だらけになって気持ちの悪いこと。全く馬鹿みたいな話ですが、本当の事です。無理が祟^たって体を悪くした私は、第四野戦病院に入院しました。この病院は生きて帰れぬと風評がありました。またの名を「四病」といつて「死病棟」と言っていました。外科、内科があり、病室は満員でした。重病人は青い蚊帳^{かや}の中で静かに観念したように、そして眠るがごとく息を引きとる者が毎日後をたたず、内科の患者の殆どは南方特有のアメーバ赤痢で断食させられていました。

「天皇陛下バンザイ」「お母さん」……と叫んで息を引きたる戦友に手を合わせて御冥福を祈ると共に、「これくらいで負けてたまるか、又戦うぞ」と意気盛んな患者もいました。患者でも重態でない限り、先輩から気合を入れられ仕事をさせられて、その為に病気が悪化して亡くなられた兵士もたくさんいました。私は戦病一種症と診断されて、日本に送還されることになりました。病院船「氷川丸」にて戦争末期の戦火の中をぐり抜けて無事に逸見港に帰還しました。

今振り返ってしみじみと亡き戦友の御冥福を祈ると共に、私の人生の中で二度と出来ない尊い体験でした。